

特集 学校カリキュラムの未来像—学校の自律性と教師の創造性〈6〉

内からの学校改革と教育実践

—富山大学人間発達科学部附属小学校の事例から

上越教育大学 瀬戸 健

はじめに

「今次教育改革の最大の特色の一つは、教育課程基準（学習指導要領）の大綱化・弾力化と学校の自主性・自立性がワンセットになったことだ」との「仮定」において、1998年の基準改訂は「エポックメイキングをなすもの」だと中留はいう^①。このような規制緩和とともに、教育特区や学校選択制が導入され、地域間競争、学校間競争が現実のものになりつつある。

従来、国立大学の附属学校は、研究開発校、モデル校、教育実習校として地域で独自の地位を保ってきた。しかし近年、富山市のような地方都市においても、私立中高一貫校が設立されるとともに市教育委員会が公立小中一貫校を設置し、さらに中学校に学校選択制を導入するなど競争的な環境が生まれつつある。附属学校も入学者の獲得を巡って、それらの学校と競争せざるをえない状況になったと言える。さらに富山大学には固有の課題もあった。独立行政法人化に続き、富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学の三大学統合と、教育学部の人間発達科学部への改組が待っていた。ここでも、附属学校は存続をかけて実績を残すことが求められた。そのようななかで、筆者は平成15年から4年間、富山大学教育学部附属小学校（現、人間発達科学部附属小学校。以下、本校という）の副校長を務めた。

学校改革は、報告者の立場によって見える地平が変化する。学級担任であれば教育実践の変化が、管理職であれば学校経営改革が、研究者であればよ

り鳥瞰的な視野から学校のダイナミズムが見えるであろう。本稿は、附属小学校に勤務した一管理職がどのように学校改革を行い、そこにはどのような教育実践上の問題があったのか、管理職の立場からの事例報告である。

1. グランドデザインの策定と教育内容

(1) グランドデザインをつくる

まず手掛けたのは、新たな学校研究テーマの設定である。「追究を楽しむ授業の創造」には平成元年から取り組み、すでに15年を経過してほぼ研究しつくした状態になっていた。そこで、新たなテーマの設定にあたっては、ぜひ「対話」というキーワードを入れたいと考えた。もちろん、「対話」には、多田が言うように「21世紀の多文化共生社会の現実化を直視し、そうした社会で、生きて働く、役に立つ対話力を」子どもたちに「育成する必要がある」という高い理想がある^②。さらに、経営の観点から考えたとき、「対話」を選ばせる二つの要素があった。

一つは、本校校長 雨宮洋司が企画した「環日本海域小学校授業交流」に競争的経費が付いたことである。もう一つは、本校は35年前から約15年間、「対話的思考による学習」の研究を推進し、3冊の学校研究を上梓するなど、歴史的にみても「対話」は本校研究を象徴する言葉であったことである。また、学校に不応を起す児童の存在も気になった。学校研究も含めて、様々な課題を包含する統一的なテーマはないかと考え、思いついたのが「対話」だったのである。

全教員に新たな学校研究としての「対話」を提案し、了承を得るとともに、詳細な研究計画は研究部に任せた。研究部から提示されたテーマは、「対話する子供を目指して」であった。

そこで、このテーマを中心として平成15年8月までに学校のグランドデザイン(図1)の骨格を作り上げ、まず教職員に、次いでPTAへの説明も行い協力を求めた。

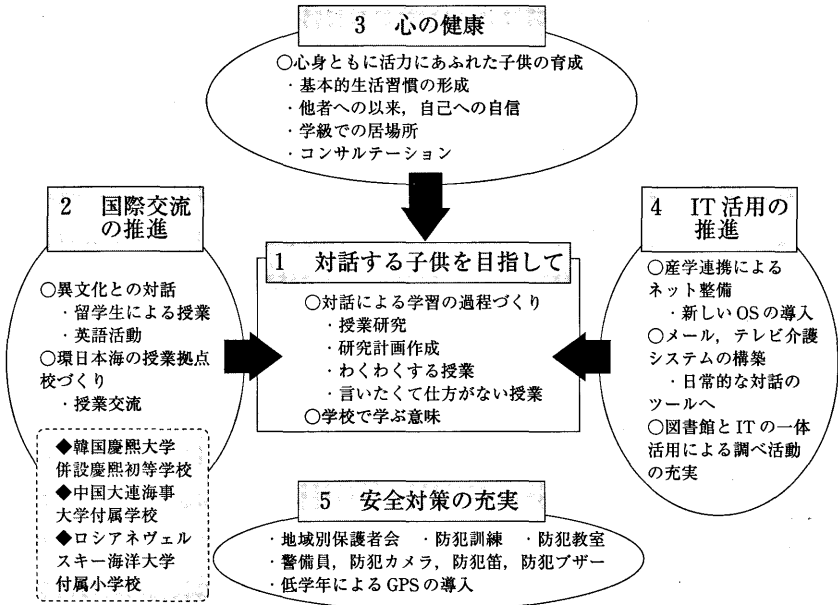


図1 本校のグランドデザイン

(2) グランドデザインによるカリキュラムへの影響

新たなグランドデザインの特徴は、授業を「対話する子供が育つ大切な時間」ととらえ、それを学校経営の中核に据えるとともに、授業を支えるサブシステムを新たに意識化し、意図的に整備したことである。これにより、授業はさらに効果的になると考えた。

しかし、このサブシステムには、もう一つのねらいがあった。附属学校は、伝統的に研究開発校であり、授業さえしていればよいという雰囲気は校内にはある。しかし、学校間の競争の環境が生まれている現在では、それだけでは優位を保つことはできない。最新の教育情報を踏まえて新たな教育実践に果敢に挑戦していくための意識改革を、このサブシステムに期待したのである。三つのサブシステムの内容とそれによるカリキュラムへの影響は、次のようである。

①心の健康

平成10年ごろには見あたらなかった学校不適應の子どもが、5年を経た平成15年には明らかに見えるようになっていた。子どもの急激な変化である。養護教諭は、それらの子どもたちに積極的にかかわるだけでなく、OK グラムや QU テストの導入を積極的に求めていた。

学校研究のなかには、「子ども自らが『対話』をひらくには、なによりも健康な心をもっていることが大切である」「学校や家庭に気になることがあると、子どもは他者と言葉を交わすような気分ではなくなってしまう」として対話の前提として「心の健康」を位置づけ、これら QU テスト等の調査を学期に一度ずつ実施するようにした。また、その実施に合わせて外部から指導者を招聘しコンサルテーションも行った。教員たちは子どもに対する感覚が鋭く、「あの子は、何か変だぞ」とよく言う。しかし、何が原因なのか、どうしてそうなっているのかが分からないので、手を拱いていることも少なくない。コンサルテーションでは指導のガイドラインが示されるので、教員たちは安心して子どもに立ち向かうことができるようになる。だから、コンサルテーションは教員たちに好感をもって迎えられた。このことによって、養護教諭が子どもたちに対してもつ危機感が、教職員間の共通の認識になる契機となったと考えている。

その後、養護教諭が中心となり生徒指導部が協力して行った調査により、基本的生活習慣が身に付いている子どもは心の健康度が高いこと、早寝・早起きする子は、基本的生活習慣も身に付いていることが多く、学業成績も高いなどが明らかにされていくことになる。

カリキュラムへの明確な影響は、授業の中に定期的に調査が組み込まれた程度である。しかし、コンサルテーションでの情報は、担任等に子どもにかかわるときの留意点や方向性を与えたのであり、学級内での教員と子どもの関係は変化したであろう。だが、それらはまったく一人ひとりの教員の内面深くにしまわれていることである。同様に、基本的生活習慣と子どもの心の健康との関連をみた調査の結果も、保健委員会主催の児童集会や日常活動のなかに生かされるのが主で、カリキュラムへの明確な影響はほとんどない。もしあるとすれば、それを指導する教員が以前は持ち得なかった「基本的生

活習慣の指導が、心の健康を高める」という確信を、今は全教職員がもっているということである。

②IT活用の推進

赴任時、校内のIT環境は、最悪であった。児童用PCは老朽化し、立ち上げるのにかなりの時間を要していたし、学校全体のネットワークもファイヤー・ウォールが完璧でなく、侵入するウイルスに悩まされていた。校費を投入して新たな機材を購入するだけでなく、産学連携を通して企業から新たな管理ソフトの提供を受け、ファイヤー・ウォールを二重にして校内のシステムを作り上げた。コンピュータ室に20台の児童用PCを、他の20台を教室前の多目的スペースに分散配置し、それらも職員室の教員用PCで一括管理できるようにした。

学校研究のなかには、「対話のツール」として位置づけた。

「心の健康」と同様に、このサブシステムもカリキュラムへの明確な影響は小さい。PCの使い方や情報モラルについての学習を、3年生を対象に3時間程度、総合的な学習の時間に組み入れた程度である。しかしIT環境が整うにつれて、教員たちは授業にPCを取り入れるようになってきた。たとえば、図画工作科では、子どもが気に入った風景をデジタルカメラを用いてPC内に取り込み、それを材料に新たなコラージュをつくるといった学習活動もみられるようになったのである。もちろん、これも各教員のレベルで留まり、学校全体のカリキュラムに組み入れられることはない。あるのは、各教員が「これ使える」というPCへの信頼であり、それが授業でのPC利用回数を増やしたことであろうか。

その後、平成18年に至って、このようなIT環境を背景に文部科学省委託事業「地上デジタル放送の教育活用促進事業」の指定を受けることができた。この企画からも新しい試みが生まれ、斬新な実践が誕生していった。

③国際交流の推進

カリキュラムに最も明確に影響を与えたのが、「国際交流の推進」であった。先にもふれたように、雨宮が獲得した競争的経費の企画は、「環日本海地域小学校授業交流」である。互いの国の教員がそれぞれ教材をもって日本海

を渡り、まったく知らない、言葉も通じない子どもたちを借りて、いわゆる「飛び込み授業」をする。相手校として大韓民国の慶熙大学併設慶熙初等学校、中華人民共和国の大連海事大学附属小中学校、ロシア、ウラジオストクのネヴェルスキー海洋大学附属小学校を選んだ。

この活動は、一方で教員の資質向上プログラムとしての性格をもつが、他方、飛び込み授業の対象となる子どもたちにもよい異文化学習の機会となる。そこで、単に授業を交流するだけでなく、いくつかの基盤としてのカリキュラムを整備することとした。

一つは、「英語活動」の導入である。本校は平成14年度までまったく英語活動を実施していなかった。平成15年9月までに、非常勤のALTと日本人の指導助手を獲得し、3年生以上の全学級に年間27時間を行うようにした。さらに、「環日本海域小学校授業交流」と連動して、大学の留学生を活用した「ハングル活動」「中国語活動」「ロシア語活動」も3年生以上の各学級に年間各1時間、年3時間を入れることとした。

雨宮は、欧米に偏った国際理解教育だけでなく、東アジアの一員としての国際理解教育があるべきであるという。だから、この留学生を活用したプログラムの構築には積極的であった。また、教員を対象にした「環日本海域小学校授業交流」も、国を超えて彼の国の教員と我が国の子どもが、我が国の教員と彼の国の子どもたちが師弟関係を結ぶ、貴重な機会だとも言う。重層的なカリキュラムをつくることができたといえる。

④学校改革の手法と外部人材

本校が平成15年度に行った学校改革は、きわめて急進的であったといえる。短期間に「学校研究テーマ」を変え、「グランドデザイン」をつくり、さらに新たな教育内容をもちこんだのである。これらを可能にした要因として、二つをあげることができる。一つは、大学という多様な知識集団を活用できたことである。たとえば、「心の健康」には稲垣応顕、「IT活用の推進」には高橋純、「英語活動」には新里眞男、「留学生の活用」には林夏生、呉人恵らの大学教員が関わり、最も効率的な手順で進むことができた。もう一つは、経済的な裏付けである。競争的経費の獲得のほか、附属学園の事務担当が

様々な方策を駆使して予算獲得に奔走してくれた。

実は、筆者は急進的な学校改革にはあまり賛成しない。各学校には、長い年月をかけて醸成してきた学校文化があり、それは毎年の教育活動という吟味を加えられながらも、なお生き残ってきたものだからである。したがって、学校改革の基本は、細やかな「修正」を何度も繰り返すといった、柔軟でゆっくりとしたものがよいと考える。

しかし、学校間競争を視野に入れたとき、とくに常に優位を保つことを求められる附属学校では、誰よりも早く教職員の意識改革を行い、新機軸の企画をアピールして成果を出していかなばならないという宿命がある。附属学校がなくても子どもたちには地域の公立学校に就学することができる。だから、附属学校は一面で「なくてもよい学校」なのである。そのなくてもよい学校を、「あってほしい学校」にするには、それだけの努力がいる。急進的な学校改革という手法は、まさに教職員の意識改革をねらったものだったと言ってよい。

2. 学校研究テーマによる授業の変化

(1) 新たなテーマの設定

平成元年から取り組んだ学校研究「追究を楽しむ授業の創造」は、子どもが教材（以下、ものという）や他者（以下、人という）にかかわりを求める姿を「追究を楽しむ姿」としてとらえ、実践研究を重ねてきた。新たに「対話する子供を目指して」を掲げるにあたり、次の二つを期待した。

一つは、「かかわり」をより厳密にとらえることである。たとえば、ある子が「教えて」と言って他者にかかわりを求めたとする。この場合、情報は教える側から教えられる側に一方向で流れ、双方向のやりとりになりにくい。対話は互いが交互に言葉を発し、対等な立場でなされる。かかわりが双方向となる。対話を取り上げることで、かかわりを求め合う姿を言語を介して厳密にとらえ、それをもとに授業を改善して学び合う子どもを育てようと考えたのである。

もう一つは、共生の観点を加えることである。「追究を楽しむ」では、子どもが「もの」や「人」にかかわりを求める姿に注目した。つまり、一人ひとりが、学びたい、知りたい、やってみたいという内的な力を高め、対象からの反応を期待して働きかけていくという、その子の自立的な姿勢を重視した。「対話」研究では、他者に言語を介してかかわり、一人ひとりの内につくり上げた「意味あるもの」を出し合い、理解し合って互いにとって「価値あるもの」にするという、歩み寄り、分かり合おうとするという共生的な視点をも加えようとしたのである。この二つによって、実践研究は格段に難しくなったと言える。

(2) 新たな学習過程の想定と授業の変化

①新たな学習過程の想定

新たな研究テーマ設定から10ヵ月を経過した平成16年2月、研究部はこれまでの研究のまとめとして新たな学習過程モデルを提案する。(図2)本校対話モデルの特徴は、対話が開かれる前に、必ず子どもたちはものにかかわりを求め、一人ひとりの内にその子にとって「意味あるもの」をつくり上げていると考えているところにある。ものとのかかわりによる発見や気付きは、子どもたちを「話したくて話したくてならない」状態にするのである。

このような学習過程の想定は、対話のスキル学習を重ねて、そこから対話する子どもを創り出そうとするやり方の対極をなす。私たちは、あくまでも子どもの内なる力によって対話を開くようにしたいと考えたのである。

②授業の変化

しかし、平成16年5月に行われた本校教育研究発表会では、好対照をなす2種類の実践が見られることとなる。その変化がより明確にとらえられるよう平成15年度教育研究発表会の指導案と比較しながら説明する。

・A 教諭の実践

A 教諭は、「追究を楽しむ授業の創造」の最後の研究会である平成15年5月の指導案には、次のように教材観を書いている。単元は、2年生算数の「長さの単位」である。

『びっくりピョーン』は、名前の通り、跳ばないのかと思ったら急にピョーンと跳ぶ面白いおもちゃである。子供たちは『びっくりピョーン』で遊ぶことが大好きである。この遊びに夢中になれば、自然に跳んだ長さを友達と競い、長さを測定するであろう。

ここで注目しておかねばならないのは、『びっくりピョーン』という子どもが楽しんで活動できる教材を選んでいることである。図工の時間に作り、自分で工夫してより大きく跳ぶようにする。そして、友だちと心ゆくまで遊ぶことを、この単元の導入としているのである。つまり、単元の導入に細心の注意を払っていると言える。

ところが1年後、「対話する子供を目指して」を掲げての最初の教育研究発表会では、A教諭の指導案は大きく変化する。単元は、4年算数「わり算のしかたを考えよう」である。まず、指導案の作成にあたっては、「数と計算」領域の系統性から、次の5点を大切にしたいと述べる。

- ア、筆算することへの疑問
- イ、数の多面的な見方
- ウ、算数的活動と筆算の併用
- エ、筆算することのよさ
- オ、自力解決できた満足感

そして、全体計画では、第2次の「2位数、3位数を1位数でわる除法」に最も力を注ぎ次のように言う。

筆算の意味やよさに気付くことができるように、すぐに筆算に導入せず、半具体物を使って除法の仕方を考えるという算数的活動の場に時間をかける。その過程で子供たちは、より簡略化された方法の必要性を感じ始めるであろう。子供たちが試行錯誤しながら、筆算に近い方法を考え出したとき初めて筆算形式を導入する。

A教諭は、「対話する子供を目指して」を授業で考えたとき、「活動の面白さ」よりは、「教科の面白さ」を大切にしたのである。半具体物を使って

表1 B教諭の全体計画の比較

	追究を楽しむ授業の創造	対話する子供を目指して
単元名	さぐろう、考えよう、つくろう、はくわたしの富山-ファミリーパークが目指すもの- (6年)	えがこう、未来のふるさと富山-墨がおりなす「わ」の世界- (5年)
第一次	子供がファミリーパークの目指しているものを実感できる共通体験を行う。そして、 <u>活動後に感じたこと、考えたことを出し合い深めあう場を大切に</u> する。(中略) <u>自分が本当に伝えたいことが明確になるように</u> する。	水墨画のよさやすばらしさを実感できる <u>価値ある体験活動を設定</u> する。(中略) <u>体験活動後に話し合う場を設定</u> することにより、 <u>願いを強くしながら体験に裏打ちされた自分の「水墨画」観を語り出す</u> と考える。
第二次	広げたい考え、内容、方法について、みんなで話し合う。話し合いでは、 <u>それぞれの考えや活動がクラス全体の中でどこに位置付き、「目指しているものをたくさんの人に理解してもらおう」という願いに向けてどんな役割を担っているかを明確にする。</u> (以下略)	「伝えたい水墨画の面白さ、すばらしさ」が明確になることが、「活動の意味」の自覚につながり、友達や専門家、地域の方へ心を開いてかかわっていく姿を生む。そこで、 <u>クラス全体で一人一人の追究を位置づけたり、広げたい内容と方法のつながりを吟味する場面を設けたりする。</u>
第三次	それぞれの活動状況が分かる <u>掲示や活動報告会</u> などを行い、クラスの中での自分たちの活動を意識できるようにする。また、 <u>ファミリーパークの職員や「いきものメイト」の方から評価をいただくなどして、満足感や充実感を味わえるように</u> する。	「できた自分」「やり逃げた自分」を実感するといった、自分のよさや高まりの気付きが、願いをより強固にしていく。そこで、 <u>中間発表会で友達の評価を行ったり、専門家による外部評価を受けたりする。</u> (以下略)

※アンダーラインは、比較のために筆者がつけた。

様々に試行錯誤させ、一人ひとりがたくさんの気付きを手に入れられるようにする。そうすると子どもたちは、その気付きを「言いたくて言いたくてたまらない」状態になるであろう。そのような内なる力を高めることによって「対話」を創り出そうとしたのである。それは、『びっくりピョーン』での「跳んだ」「跳ばない」の水準を超えて、教科本来の「学ぶ楽しみ」を対話の入口にしたと言えるのではないか。

・B教諭の実践

これに対して、B教諭の総合的な学習の実践は表1に示すようにあまり変化していない。教材は、15年が動物ファミリーパーク、16年は水墨画である。

この二つの実践は、非常によく似てしかし同じ弱さをもっている。二つの

点から述べる。

一つは、これらの実践が子どものこだわりから発しているように見えて、実はそのようになっていないことである。体験的な活動を通しての動物園ファミリーパークの理念を理解すること、水墨画のすばらしさを理解することからの出発は、ファミリーパークや水墨画に違和感を感じる子ども、好きになれない子どもの存在を許さない。子どもは、ファミリーパークを支持する人々、水墨画を愛好する人々の側に組み込まれ、その代弁者になっていかざるをえない仕組みになっている。

もう一つは、学習成果が、常に発信されるように出口が設定されていることである。子どもたちが発信したいかしたくないかにかかわらず、発信しなければならなくなっている。これをA教諭の実践と比べると、子どもが言いたくて言いたくてたまらないという状態をつくることよりは、学級としていかに発信していくかに実践の重点があるように見える。だから、一人ひとりが「クラスの中でどこに位置付くか」が大切になる。多様性を確保し、一人ひとりが活躍できるよう重複を避けたいからである。

(3) 誤謬を乗り越える対話

なぜ、B教諭の実践は変わらなかったのでしょうか。これは推測であるが、おそらく、「発信」＝「対話」と置き、混同したのではないか。友だちや大勢の人の前で発表し、その反応を得る。そのような応答的な環境があれば、それは「対話」だと言えるという意味づけたのであろう。

しかし、ここには根本的な誤謬がある。確かに子どもは他者と話している。その現象においては対話のように見える。しかし、「話したくてかわりを求めている」と、「話さねばならなくてかわりを求めている」との間には大きな差がある。子どもたちは賢いので、教師が「話しなさい」といえば、「はい、はい」と手を挙げ、教師の喜びそうなことを言う。教師は「そうですね」と受けて授業を進める。しかし、ここにはまるで儀式のような時間が流れているだけで、子どもがこれまで重ねてきた学習の感動も、他者に対する畏敬もない。対話の対極にある授業だと言える。

以上みてきたように、新たな取り組みの開始が、学校改革の開始ではない。新たなテーマを十分理解し、実践できるようになってはじめて学校改革が始まると言える。もちろん、それまでには、数多くの誤謬が生まれる。学校改革を推進するには、教員間生ずる小さな齟齬を一つ一つ埋めていく、そのような対話が実は最も大切なのだと考えている。

おわりに

管理職が主導し急進的な学校改革を行っても、それがすぐに紙面上に表現されるようなカリキュラムに反映されるわけではない。本稿で取り上げた学習過程モデル（図2）も実践できる者が少ないという意味で絵に描いた餅に近い。また、グランドデザインによって、確かに学習内容の追加や変更は加えられるが、それが学校の出力を急激に上昇させたという実感は少ない。そうではなく、学校改革は実は、一人ひとりの教員の内部でゆっくりと進む。コンサルテーションを通して支援が必要な子どもを知っている、環日本海域小学校授業交流を通して、各国でも様々な方法で新たな教育の模索が続いていることを知っている、PCが信頼できる教育機器であることを知っていることが、徐々に教員たちの教育活動に変化をもたらし、新たな質の高い教育活動を創り出していくことになる。その細かなゆっくりとした変化こそが学校改革の真の姿なのだと思う。実践の共有化のために本校では、加除式の実践事例集を全教員が持つ。年度末ごとに新たな授業実践をカードにし、それを加えていくことにしている。

平成20年5月、本校は『対話が授業を変える－子供の心が揺さぶられる瞬間（とき）－』を公刊した。そこには、対話が開かれてから互いが互いのよさを理解し合い、さらに次の学習へ歩み出していく過程が、明確なモデルとして示されている。この小さなモデルを世に問うまでに、5年もの歳月を要した。その間に教員の半数が入れ替わった。このことは、常に学校研究の学び直しが必要になることを意味する。実践の水準を維持すること、実践研究を推進して学校独自のカリキュラムを創り出すことは容易なことではない。

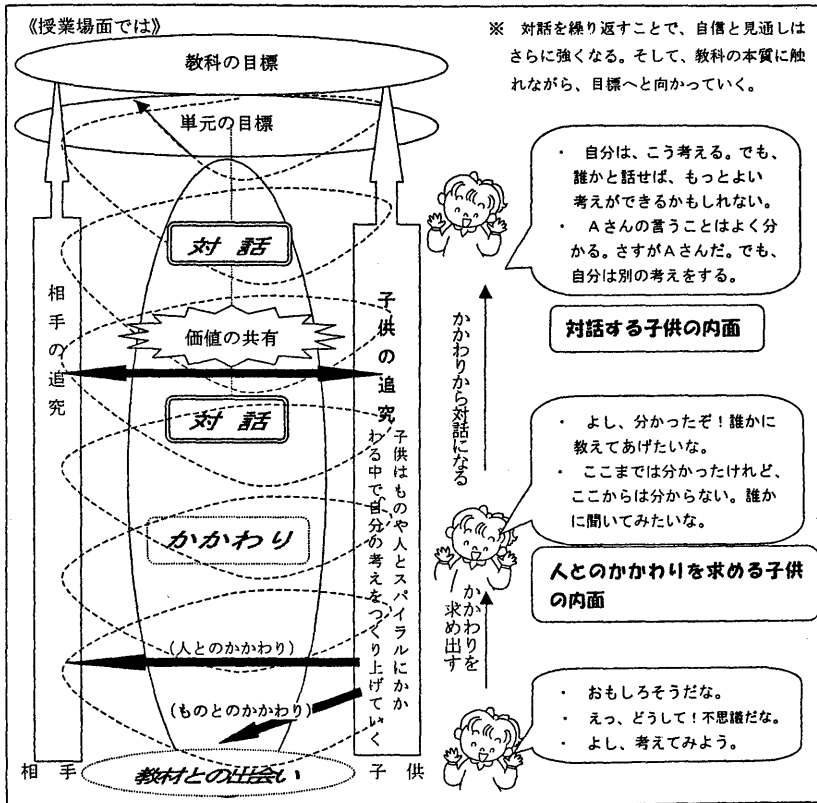


図2 新たな学習過程モデル

最後に、研究者委員会にふれておく。新たな学校研究を進めるにあたり、理論的バックボーンを得るため研究者委員会を設置し、水原克敏（東北大）、富士原紀絵（お茶の水女子大）、多田孝志（目白大）、宗孝文（仁愛大）、山西潤一（富山大）らを委員に委嘱した。本校の特徴は、これらの研究者を全員同時に学校に招き入れることである。座席も教員の間に散らしておき、本校教員の一人のように自由に討論に参加する。時には、研究者委員の間で議論が白熱することもある。このようにしたのは、教員たちの「大学の先生に教えてもらう」という「承り体質」を払拭したいと考えたからである。

研究者と実践者が対等の立場で意見を交わす。「対話」研究は、それを実

実践する実践者の対話的な姿勢の形成から始めたいと管理職が考えていたことを、同僚たちは気付いたであろうか。

[キーワード]

学校改革，学校研究，学校のグランドデザイン，対話，かかわり

〈引用文献〉

- (1) 中留武昭編著『カリキュラムマネジメントの定着過程－教育課程行政の裁量とかかわって－』教育開発研究所，2005
- (2) 多田孝志著『対話力を育てる－共創型対話が拓く地球時代のコミュニケーション－』教育出版，2006

〈参考文献〉

- 富山大学教育学部附属小学校著『平成16年度 研究計画 No28』2004
- 富山大学教育学部附属小学校著『対話的思考による学習』明治図書，1979
- 富山大学教育学部附属小学校著『追究を楽しむ授業』協同出版，1994
- 富山大学人間発達科学部附属小学校編著『対話が授業を変える－子供の心が揺さぶられる瞬間（とき）』富山大学出版会，2008